

特別賞 三省堂書店賞

『人間・この劇的なるもの』 福田恆存著

(中央新書・文庫 新潮文庫；ふ-37-2)

商学部4年 肥留川幹弘

もしもこれまでに出会った本の中で、一生の宝になるものを挙げるとするならば、迷わずにこの本を挙げる
ことができる。本書では、著者が冷徹な思考でもって、社会に広まっている曖昧なものに徹底した批判を加
えていく。本書の読者はきっと面を食らうことだろう。実際に、私もそうであった。

福田は「個性」という概念を否定し、次のように言う。「個性などというものを信じてはいけない。もしそんなも
のがあるとするれば、それは自分が演じたい役割ということにすぎぬ。」(16頁) たしかに個性を尊重すること
は、否定しようのない、至上の価値であるとみなされてきた。しかし「個性とは何か」という問いに正面から答
えてもらった記憶は一度たりともない。また「自分の個性をアピールしろ」と言われても、それがわからなくて
思い悩んだことがある。だから、この言葉は強く印象に残っている。

さらに、福田は「自由」という言葉にも批判を加える。福田は「自由によって、ひとはけっして幸福になりえな
い」(95頁)と言う。その理由は、自由が「何かをしない自由」だからである。歴史上、ある種の強制や義務を
伴わなかった時代は存在しない。それゆえに、何かをしないための自由は、単なる逃避でしかない。

このように、個性や自由などという概念は、現代の偶像に過ぎないのである。ここで誤解してはならない。
福田は決して、多くの人が支持するものを冷笑するような、単なる皮肉屋ではない。たとえ多くの人が支持し
ていることであっても、多数におもねることなく、異を唱えることができる人物なのである。それゆえに、福田
は勇気のある、誠実な人間なのだと私は思う。

それでは、人間が求めるものは何なのか。それは「生きがい」である。本書には次のような一節がある。

「私たちが真に求めているものは、自由ではない。私たちが欲するのは、ことが起るべくして起っているとい
うことだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさねばならぬことをしているという実感だ。」
(17頁)

人間が求めるものは、自分の役割という自己の宿命である。それを必死で務めることによって、人は生きが
いを感じるのだ。「なにをしてもよく、なんでもできる」というような漠然とした自由は、人の役には立たない。
大事なものは、自分の役割をはっきりと選び、それを意識的に演じ切ることである。それゆえに、本書のタイト
ルにあるように、人間は「劇的」なのである。

著者の福田恆存は、劇作家であり、演出家でもあり、そして日本を代表する批評家でもある。本書は、解
説を含め170頁程度しかなく、非常に短い作品である。しかし、その中には福田の思想が凝縮されている。
日本の言論界をリードしてきた著者の思想に触れ、圧倒される経験を、ぜひともしてみたい。